

牧師室から (2023.6.18)

先週オルガニストであり作曲家のサットマリー氏のマスタークラス、対談、およびコンサートを聴きに行った。池辺氏との対談の中で、サットマリー氏が師事していたヴァルヒャについてのこぼれ話があったのでご紹介しておく。

ヴァルヒャは20世紀を代表するオルガニストの一人である。しかしそのような相対的な表現よりも、むしろ最高峰であったと衆目の一致するところであると言ったほうがよいであろう。ご存じの方も多きかもしれないが、彼は目が不自由であった。それにもかかわらず彼の演奏は小宇宙的であった。話によると、彼はとても記憶が良かったらしい。またそれだけでなく、奥様がヴァイオリニストであって、曲の各声部の旋律をそれぞれ別々に弾いて聴かせ、彼はそれを覚えてから自分でそれらを再構築していたというのである。だから彼にとってはポリフォニックな音楽しか頭になく、音楽と言えばバッハであったというのである。

確かに各声部をそれぞれ別々に覚えてから全体を弾くというのはとても大変なことであるが、ある意味これは理想的な方法である。見えないというハンディが理想的な方法を強いたのである。それ故にこそ、彼の演奏は小宇宙的であり、頗る優れていたのであろう。

今回は彼の師であるヴァルヒャについての対談を述べたが、次回はマスタークラスとサットマリー自身の演奏についてお話したい。

(鈴木淳一牧師)